と言われ、(1)記憶と煩惱の原因。(2)薫習の相をもつ。(3)果報の原因。(4)法・非法の相をもつ、という内容が付加されている。

(1)潜在印象が記憶と煩惱の原因であることは、既に述べた心作用との関連から明らかである。

(2)潜在印象を薫習と関係づけている註釈部分を見ると、

『記憶の原因であり薫習である潜在印象は無始時来のものである』(Y. Bh. ad. II. 13)

『経験があると同様に潜在印象がある。そしてそれらは業と薫習の相 (karma-vāsanārupa) をもつ。そして薫習があると同時に記憶がある。(中略)薫習とは潜在印象の遺存 (saṁskārasaya) という意味である』(Y. Bh. ad. IV. 9)

とごうべういひある。こゝで、業の果報はそれに相応する薫習の顕現である (Y. S. IV. 8, Y. Bh. ad. IV. 8) ので、果報とこゝの苦楽の経験が、心理的には潜在印象によつてゐると考え合わせると、潜在印象と薫習とは内容的に同じであることがわかる。

(3)潜在印象が果報の原因であることについては、自己の潜在印象 (svaṁskāra) によつて果報を経験する離身者 (vidēha) に関する (Y. Bh. ad. I. 9) 註釈に於てのみ見られる。ここで言う自己の潜在印象とは、心作用を生ぜしめるという他に、果報に関する業あるいは薫習を包摂している。先に引用した『業と薫習の相をもつ』ことから、saṁskāra = karma = vāsanā とごう等式が成り立つ。

(4)潜在印象が法・非法の相をもつことは、karma → vipāka の因果関係と同様に saṁskāra → citta-vṛtti という因果関係にも善悪の価値を付加することであつて、二つの因果関係を同一と見ることになる。

以上で、潜在印象と薫習と業の三者が内容的に錯綜していることが明らかになつた。しかし、薫習が多くの生存を前提とし、かつ潜在印象と薫習とは無始時来という超時間的存在とされるのに対して、業は一生存に限られる (Y. Bh. ad. II. 13) という点が相違する。業はそれぞれの生存に相応した果報の内容を規定する薫習あるいは潜在印象を現勢化する助因にすぎないのである (Y. S. IV. 8, Y. Bh. ad. IV. 8)。

業の果報はその生存の心作用となるのであるが、ヨーガにとつて心作用はすべて煩惱で、それは無明を根本としている。無明は煩惱の連続と、果報をとまなう業遺存の根本 (Y. Bh. ad. II. 5) であり、顛倒知の薫習 (Y. Bh. ad. II. 24) であるので、超時間の実体である。ここで、無明と薫習と潜在印象とが内容的に錯綜してゐることがわかる。ただし、これら三者が、無始時来それぞれ個別に同時に、心の根源的実体として存在しているとは考えがたい。三者は人間の生存を規定する或る一つの根源的実体の三側面を表現してゐる。つまり、煩惱の面からは、無明が他を内包して根本原因とされ、記憶や表象の心作用の面からは潜在印象、業や輪廻の面からは薫習と呼ばれてゐるのである。これら三側面をもつ根源的実体は、人間存在のあらゆる行為や精神心理作用・経験を規定するものとして定立されてゐるのである。

以上、ヨーガ学派に於ける潜在印象について考察した。Y. S. では、三昧すなわち心作用の止滅の構造を明らかにするため、心作用に関する実体としてたてられていた。しかし、Y. Bh. に於ては、潜在印象のもつ実体性に、善意の倫理的価値を付加して、業や薫習と同一水準で理解してゐる。